第2節　商品に表される労働の二重性

（具体的有用的労働〕）

P.77　商品に含まれる労働のこの二面的性質は、私によってはじめて批判的に指摘されたものである。この点は、経済学の理解にとって決定的な点である。

〔不破哲三〕（「『資本論』探求　全三部を歴史的に読む」）労働の二重性の指摘はマルクスが「経済学批判」で初めておこなった。マルクスは商品社会を人間社会の歴史の一段階としてとらえている。

〔的場〕労働の二重性はマルクス最大の発見である。二つの商品を共通のものにするのが、価値であり、それは労働であったが、それならば当然、労働にも二つの労働があることになる。「使用価値をつくる労働」と「価値をつくる労働」である。

〔「マルクス主義経済学講座」上、新日本出版社〕

マルクスは第1節で商品は使用価値と価値の二つの要因、二つの性格をつきとめた。

第2節でつきとめるのは、商品の二重性の根本にある、商品を生み出す人間の労働そのものの二重性である。すなわち、具体的労働と抽象的労働である。たとえば上着（＝使用価値）をつくるには、上着をつくるのに適合した労働（＝具体的労働すなわち目的、作業様式、対象および結果）でなければ完成しない。あたりまえのことである。上着をつくる労働と布をつくる労働は、異なる具体的性質、異なる有用性をもっている。このことはすぐ理解できる。

　一方、お互いに異なる使用価値（上着、布）をつくり出す労働も、人間的労働力の社会的に必要な支出という点で同じである。この人間労働という性格が価値をつくり出している。

マルクスがつきとめたのは、人間の労働そのものが、使用価値に対応する具体的労働の性格と、すべての生産労働に共通する人間労働一般（＝抽象的労働）の二重の性格をもっていることである。このことをマルクスは価値論の根底に据えたということである。

〔浜林〕「経済学の理解にとって決定的な点である」：後述される剰余価値と搾取を理解するとき、労働の二重性が出てくる。労働力商品は、交換価値以上の価値をつくり出すという特別な性質をもっている。したがってそこで搾取が行われる時に労働の二重性が問題になる。

〔浜林〕「人間労働力の支出」：人間の脳、筋肉、神経、手などの生産的支出のことである。「商品の

二つの要因－使用価値と価値」が第1節だった。約めると使用価値は「欲求を満たすもの」であり、価値は「労働の凝固物」であった。

第2節は「商品に表される労働の二重性」である。ある商品の生産ではそれぞれやり方か違う。異なる使用価値が生産される。このとき、有用性が生産物の使用価値に表示される労働を有用労働と言う。有用労働は人間の存在条件。人間と自然の物質代謝の結果による。

p.77 上着は、一つの特殊な欲求を満たす一つの使用価値である。それをつくり出すためには一定の種類の生産的活動が必要である。この活動は、その目的、作業様式、対象、手段および結果に規定されている。その有用性がこのようにその生産物の使用価値に－またはその生産物が使用価値であるということは－表わされる労働をわれわれは簡単に有用的労働と呼ぶ。

〔浜林〕具体的有用労働の特徴の①　→　その目的、作業様式、対象および結果の一定した生産的活動である。例えば、上着は一つの使用価値である。つくり出すためには、いろいろな作業が必要であり、それを有用労働と呼ぶ。

「リンネル」：麻織物のこと。リネン室は麻織物のシーツをしまっておく部屋。

p.77 上着とリンネルとが質の異なる使用価値であるのと同じように、それらの定在を媒介する労働も質的に異なるもの－裁縫労働と織布労働である。‥同じ使用価値が同じ使用価値と交換されることはない。

〔David　Harvey〕マルクスは第2節も使用価値から始めている。使用価値は有用で「具体的」な労働よって生産された物的生産物である。具体的労働の途方もない多様性は重要である。多様性はあらゆる交換行為と社会的分業の基盤である。類似の生産物を交換したいとは思わないからである。

〔浜林〕具体的有用労働の特徴の②　→　質的に異なる労働である。何をつくるのかという目的によって性質が違う。裁縫労働は、生地から洋服をつくる。織布労働は、生地そのものをつくる。

（社会的分業が商品生産の前提）

p.78 さまざまな種類に使用価値または商品の総体のうちには、同じように多様な、属、種、科、亜種、変種を異にする有用的労働の総体－社会的分業－が現れている。社会的分業は商品生産の存在条件である。もっとも、逆に、商品生産は社会的分業の存在条件ではない。。

〔浜林〕具体的有用労働の特徴の③　→　社会的分業の体制をつくっている。私的労働（自立、独立）の生産物だけが、商品として相対している。

「さまざまな……現れている」：世の中にはさまざまな労働があると言っている。みな同じことをやっていれば、世の中は成り立たない。社会的分業である。

「存在条件」：「旧版」では「実存条件」と訳されていた。いろいろな物をつくって、分業が行われているから交換がある。だから商品交換がある。分業がなければ、同じものをつくっていれば、商品交換はない。商品生産が行われるためには、分業がなければならない。

分業があっても商品生産が行われない場合・領主が年貢としてとりあげ、今度は領主が分配する。

・日本の古代。天皇と「綾部」の分配の話。

「自立的な、互いに独立の、私的労働の生産物だけが、互いに商品として相対するのである」：独立した生産者がそれぞれ生産物を交換する場合にのみ商品が生まれる。古代インドの共同体でも、工場の中でも、独立した私的労働にはなっていない。商品は出現していない。商品生産が行われるのはある時代からはじまる。もともとの人間社会では商品生産が行われていなかった。この社会区分こそ、マルクスの歴史分析の特色である。

商品生産が出現するのは、それぞれの労働が独立している社会的な分業の世界であるということである。

〔的場〕商品を交換する社会とそうでない社会とを区別し、歴史的にみる必要がある。商品交換が存在するのは、ある社会からである。

（人間と自然の物質的代謝）

p.79　人間と自然との物質代謝を、それゆえ人間的生活を、媒介する永遠の自然的必然性である。

〔浜林〕具体的有用労働の特徴の④ →　物質代謝の永遠の自然的必然性である。人間の生活を媒介している。

「物質代謝」：人間が自然に働きかけて、自然から物をとり出し、あるいは加工して生活に必要なものをつくっていくこと。人間が自然とのという。自然と人間の間で、物質が入れ替わるである。家も朽ちて土になる。人間自身が土葬で土にもどる。

〔David　Harvey〕人間存在と自然の媒介者としての労働を基軸とする「物質代謝」という思想は、マルクスの史的唯物論の中心に位置している。

（労働は富の父、土地は母）

p.80ウィリアム・ペティが言っているように。労働は素材的富の父である。土地は母である。

〔浜林〕具体的有用労働の特徴の⑤　→　労働は無から有をつくり出さない。材料（素材）がある。

　「労働は素材的富の父である。土地は母である」：土地を自然と言い換えてもよい。海から魚をとる場合は、「海は母」といえる。

マルクス以前の経済学は、物の価値を考えるとき、自然の恵みを入れた。（ペティの場合）つまり、労働＋自然の恵みで価値が決まると考えた。自然の恵みは地主のものであり、生産物の一部は地主のものとなった。ケネー（重農主義）－富のもとは農業。工業や商業は農業がつくり出したものをグルグル回しているだけである。アダム・スミス－農業だけではない。工業も商業も富をつくり出すと考えた。

〔David　Harvey〕「使用価値は二つの要素の結合物、自然素材と労働の結合物である」「人間は、彼の生産において、ただ自然そのものがやる通りにやることができるだけである」。これは、われわれが行うことは何であれ、自然法則と一致していなければならないということである。

　マルクスは、価値の同質性あ（人間労働のすべての生産物）と使用価値および具体的形態の労働の途方もない異質性を対照させるために、価値に立ち返っている。

　「商品価値は、ただ人間労働を、人間労働一般の支出を表している」マルクスはこれを「抽象的人間労働」とよぶ。

〔的場〕商品生産社会の労働は、自然に働きかけ、使用価値をつくるというだけではない。交換するための価値をつくり出す社会である。その労働は、具体的な労働ではなく、人間労働という抽象的なものを意味している。そこで問題になっているのは、質ではなく量である。

（商品価値）（単純労働と複雑労働）

p.81より複雑な労働は、単純労働の、あるいはむしろ単純労働としてのみ通用し、その結果、より小さな分量の複雑労働がより大きい分量の単純労働に等しいことになる。この還元が、絶えず行われていることは、経験が示している。ある商品はもっとも複雑な生産物であるかもしれないが、そのは、その商品を単純労働の生産物に等置するのであり、したがって、それ自身、一定分量の単純労働を表すにすぎない。さまざまな種類の労働がその度量単位である単純労働に還元されるさまざまな比率は、一つの社会的過程によって生産者たちの背後で確定され、したがって生産者たちにとっては慣習によって与えられるかのように見える。簡単にするため、以下ではどんな種類の労働力をも単純な労働力とみなすが、それは、還元の労を省くためにほかならない。

〔浜林〕抽象的人間労働の特徴①　→　人間の脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出であり、こうした意味で人間労働である。

抽象的人間労働の特徴②　→　人間労働、人間労働一般の支出が商品の価値を表わす。

〔David　Harvey〕〔還元問題」はきわめて論争的になっている。生産される商品の価値とは独立に熟練労働（複雑労働）がいかにして単純労働に還元されるのか明らかではない。マルクスは自分が念頭においているのが、いかなる「経験」であるかを明らかにしていないからである。

マルクスは労働の抽象的側面（同質）と具体的有用労働側面（異質）は、単一の労働行為の中で統一されているとする。この二重性は、単一の労働過程、たとえばシャツをつくる具体的労働がなければ、価値が体現されることはありえないという意味である。さらにシャツが靴やリンゴになどと交換されていなければ、われわれにはどんな価値かわからないという意味である。抽象的労働の尺度が出現するのは、多様な具体的労働を通じてである。

p.83　ただ人間的労働力の支出としてのみ通用する。

〔浜林〕抽象的人間労働の特徴③　→　具体的有用労働は異なる質によって使用価値の形成要素になり、抽象的人間労働は同じ質をもっている限りで価値の実体になる。

（生産力が上昇すると使用価値は増えるが、価値は下がる）

p.84 たとえば、一着の上着の生産に必要とされるすべての有用的労働の生産力が不変のままであれば、上着の価値の大きさは、上着自身の量が増えるにつれて増大する。

P.85　より大きい分量の使用価値は、それ自体としては、より大きな素材的富をなす。二着の上着は、一着の上着より大きな素材的富をなす。二着の上着があれば、2人に着せることができるが、一着の上着では1人にしか着せられない、等々。とはいえ、素材的富の量が増大するのに対応して、同時にその価値の大きさが低下することもありうる。このような対立的運動は、労働の二面的性格から生じる。総量の価値の大きさを減少させる。反対の場合は逆になる。

〔浜林〕労働の生産力と価値－生産力は具体的労働の生産力である。生産力の変動は価値で表されている労働そのものには少しも影響しない。同じ労働はおなじ時間には、生産力がどんなに変動しようとも、つねに同じ価値量を生み出す。

〔的場〕商品生産社会で重要なことは、有用な労働をしているかどうかではなく、価値を生む労働をしているかどうかである。商品生産社会の労働は二重になっている。非生産社会には二重性がなかった。マルクスが発見したのは、二重性と同時にこの歴史的な相違である。商品生産社会に暮らす人々はこのことに気づかない。

p.85　すべての労働は一面では、生理学的な意味での人間的労働力の支出であり、同等な人間的労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品価値を形成する。他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間的労働力の支出であり、具体的有用労働という属性において、それは使用価値を生産する。

〔David Harvey〕二重性は、単一の労働過程。つまり価値を体現しているシャツをつくることのうちに存在する。シャツをつくる具体的労働がなければ、価値が体現されることはありえない、

了